

【銅賞】

『祖母のあたたかいごはん』

都城市立山田小学校 5年 久保田 芭玖斗

台風がきた。毎年くるためぼくは、いつもの事だとくらいに思っていた。すると、停電が起こった。冷ぞう庫、電気、何もかもがつかない。ぼくは、不安でいっぱいだった。すると、近くの祖母から電話があった。

「ごはんを準備するからみんなでおいで。」

との電話だった。ぼくは、不安の中、家族全員で祖父母宅へ向かった。すると、あたたかいたきたてのごはんと、物が準備されていた。ぼくは、電気もついていないのに、なぜこんなに料理があるのか、祖母に聞いた。すると、

「台風がくると停電になったり色々あるからたくさんに物をつくってたのよ。」
と言った。ぼくは、

「すごいな。ちゃんと準備してたんだ。」

とおどろいた。そしてそのあと、祖母が、

「ごはんは、ガスとなべでたいたんだよ。」

とおしえてくれた。ぼくは、

「そっかなべでごはんは、たけるんだ。」

と思った。しかし母は、

「わたし、なべでごはんなんかたけない。とても火加減がむずかしい。」

と言っていた。祖母も火を強くしたり、弱くしたりと火加減がむずかしいと言っていた。

そのたきたてのごはんは、米つぶがピカピカ光っていて、ふっくらした、とてもおいしいごはんだった。すいはんきでいたごはんとは、べつものだと思っぐらいだった。

また、なべぞこについたおこげが、おせんべいみたいでカリカリしておいしくおどろいた。停電で家は、くらく不安でも、あたたかいごはんがあることで自然に安心さがでてきて、家族の会話もはずんだ。

今回のことで災害がおこる前に色々なそなえがひつようなことがわかった。その中でも食べることは、生きていくことでも必要なことだ。ぼくは、料理が好きで、みそ汁を作ったり魚をさばくことができる。いつか祖母になべでごはんのたきかたを、習いそういったときに、いつでもあたたかいごはんを食べるようにしたい。そして、ぼくの不安がへつたように周りの人の不安をへらしていきたい。